

スクールソーシャルワーカーの実践プロセスに関する試行調査

- 実践モデルの開発研究として -

大阪府立大学人間社会学研究科博士後期課程 厨子 健一 (7689)

山野 則子 (大阪府立大学・3203)

キーワード：スクールソーシャルワーカーの実践プロセス，試行調査，実践的活用

1. 研究目的

2008年度「スクールソーシャルワーカー活用事業」が全国展開されたものの、その真価が問われている。スクールソーシャルワーカー（SSW_r）総人数の減少や予算削減によって、学校配置から市区町村教育委員会が各学校へ派遣する形となるなど、スクールソーシャルワーク（SSW）の制度は決して安泰ではなく、まだ制度成立期であるといわれている。そのような状況において、SSW_rの有効性を、実践モデルや実践プロセスの提示という形で、可視化していくことが制度の発展につながると考える。

本研究は、現場に使用可能な実践モデルの開発を目的としたM-D&Dの手続きに基づいて行ってきた。M-D&Dの手続きは、問題の把握と分析、たたき台のデザイン、試行と改良、普及と詠え、という4段階である（芝野 2002）。第1段階の問題の把握やニーズの把握として、教師が学校現場において、どのような問題に困難を抱えているのかについて量的調査を行った（山野 2008）。結果、教師は、専門家は援助を必要と判断し、保護者や子どもなどの当事者は援助を希望しない領域において、困難を抱えていることが明らかとなった。そこで、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて、当事者に問題意識がない領域に関わろうとするSSW_rの実践プロセスを明確にし（赤尾・山野・厨子 2011；厨子・山野 近刊）、第2段階であるたたき台のモデル構築を行った。本調査は、モデルに基づいて、現場で活用できるように具体的行動レベルの項目を作成し、その実行を試みる第3段階にあたる。本調査目的は、モデルを実際に現場で試行して実態を明らかにし、作成したモデルが実行可能なものか検討することである。

2. 研究の視点および方法

作成したモデルに基づいて、学校ごとのチェックリストと、事例ごとのチェックリストを作成した。プリテストとして4名のSSW_rにチェックを依頼し、修正をくわえ本格的に試行調査を実施した。最終的に作成されたチェックリストは学校ごと：27項目、事例ごと：34項目から構成される。大阪府内3市のSSW_r13名にチェックリスト実施依頼をし、学校：26校、事例：45事例分を回収した。SPSS16.0Jを用いて量的分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査の実施にあたって、調査協力者、調査協力者が所属する教育委員会担当者にあらかじめ調査目的や守秘義務に関する文書を提示し、試行調査実施前にも再度確認を行った。また、学校・事例レベルのチェックリストの処理にあたっては、個人が特定されないように配慮し、個人情報保護を遵守した。なお、本調査は、大阪府立大学研究倫理委員会の承

認を得て実施されたものである。

4. 研究結果

学校、事例それぞれのチェックリストの結果から、行わなかった項目は存在しなかったため、作成されたモデルは試行に耐えうるモデルであり、これは生成したグラウンデッド・セオリーの実践的活用がなされていたといえる。

その内容を分析すると、学校ごとのチェックリストから以下のことが明らかとなった。SSWr 全員が行っている実践は、「管理職のニーズを把握する」「学校に導入されたSSWを教師が活用したいかどうかを把握する」であった。一方、「教育委員会が目的を持ってSSWを活用し、それに合う学校を選択するように働きかける」「SSWr用の机を配置するなど物理的居場所を教師にわかるように場所の確保に取り組んだ」が、25校中8校と最も少なかった。学校にはじめて行った月から何か月目にその項目を行ったかについて、月平均を調べた項目ごとの時間チェックでは、「SSWrの存在を関係機関に対して知ってもらうように取り組んだ」が3.13か月と実行するのに一番時間を要していた。学校に入った1か月目から行っていた項目は、「教育委員会が目的を持ってSSWを活用し、それに合う学校を選択するように働きかける」であった。

事例レベルのチェックリストでは以下のことが明らかとなった。SSWrの実行が最も多かった項目は、「関係する教師や関係機関から当事者の情報を集めた」であり、45事例中44事例が行っていた。一番行えていない項目は、「困ったときにSVを活用した」であり、45事例中8事例であった。時間チェックでは、「SSWが知られていない学校での活動のためSSWrとしてのプライドや価値がゆらいだときに、仲間との会話や自己の使命感によって、SSWrとしての自身のプライドや価値を立て直した」という項目が、学校に入った1か月目から行っていた。一方、「SSWrから見て、教師は考え方ややり方のバラエティが増えて主体的に活動を行うようになったと感じる」という項目が、平均12.5か月で一番時間を要していた。

本調査は、文部科学省科学研究【基盤研究(C)】「スクールソーシャルワークのメゾ・マクロ実践モデル構築」(研究代表者：山野則子)の助成により実施したものである。

参考文献

- 赤尾清子・山野則子・厨子健一(2011)「スクールソーシャルワーク実践に関する実証的研究 - 教師と家庭のつながりなおしプロセス - 」『子ども家庭福祉学』10, 59-68.
- 芝野松次郎(2002)『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』有斐閣.
- 山野則子(2008)『日本におけるスクールソーシャルワークの実証的研究 - 福祉の固有性の探求 - 』平成19年度文部科学省科学研究報告書, 大阪府立大学山野研究室.
- 厨子健一・山野則子(近刊)「スクールソーシャルワーカーの実践プロセスに影響を与える要因 - 当事者に問題意識がない領域に関わるスクールソーシャルワーカーに着目して - 」『社会福祉学』.